

# 小説版〈ファミリー・ヒストリー〉

ターハル・ベン・ジェルーンとレイラ・スリマニの  
近作に見るモロッコ現代史の暗部

有田 英也

キーワード：モロッコ、歴史、小説、自伝、ハサン2世

## はじめに

本論は、まだ翻訳のない2作品を取り上げ、NHKの人気番組「ファミリー・ヒストリー」になぞらえてその内容の一部を紹介するものである。ターハル・ベン・ジェルーンとレイラ・スリマニは、ともにモロッコ出身のフランス語作家で、ゴンクール賞を受賞した小説家である。その近作を手がかりに、モロッコ王ハサン2世統治下（1961-1999）の「鉛の時代」がどのように物語化されているかを検討する。本論の筆者はフランコフォニー文学でも、サハラ以北のフランス語圏アフリカ現代史でも素人同然だが、近年、フランス以外を郷土とする、概ね3世代まで遡った一族の語りを、ユダヤ系フランス語現代作家に即して研究している<sup>(1)</sup>。今回、非ユダヤ系作家に注目したのは、研究上のバランスを取ろうとしたからだが、二人の作家の近作が面白かったためでもある。

自分自身の若い頃の体験を実録風に、あるいは祖父母から両親、その兄弟姉妹の事跡を、時には英雄物語風に、時には、家に伝わるご先祖様の武勇伝風に、あるいは三人称視点で大河小説風を書くのは、外国出身のフランス語作家にあってそう珍しいことではない。だが、ターハル・ベン・ジェルーンは『懲罰 (La Punition)』（2018）によって、「この試練と不正がなかったら、僕は決してものを書かなかったであろう」<sup>(2)</sup>と、作家の原風景と言うべき事件を公にした。物語の最終ページは次の言葉で締めくくられている。

「僕が『懲罰』を書いて、この物語にあえて立ち戻って、言葉を見つけるためには、ほとんど50年が必要だったことになる。」(BJ, 161)

一方、レイラ・スリマニは、一族のサーガ（英雄物語）とも言うべき三部作『他人の国』第2巻『私たちが踊るところを見て』（2022）に、ベン・ジェルーンが語った二つの事件を組み込んでいる。そして、巻末で、「私の物語に絶えず教示してくれるターハル・ベン・ジェルーンに多謝」<sup>(3)</sup>と敬意を表すとともに、自分の物語の信憑性を担保する者たちを次のように呼び起こす。

「鉛の時代の犯罪について公正和解委員会で証言したすべての勇気ある人々に、私はここで敬意を表明します。」(S, 368)

公正和解委員会とは、モロッコにおける人権侵害の被害者を救済するためにムハンマド6世が2004年に設立した団体である。このように、ベン・ジェルーンもスリマニも、自分の書いた物語に対して、巻末なり謝辞なり作品の縁にあたる部分で「作者」として発言するとともに、「歴史」によってフィクションを裏打ちしている。なぜフィクションかと言えば、スリマニの本の表紙には、題名の下に「小説 (roman)」と印字されており、ベン・ジェルーンはTV5 Mondeのインタビュー（聞き手はパトリック・シモナン、2018年2月20日）で同作品を、小説 (roman) ではないものの「物語 (récit)」と呼んでいるからである。さらに、語られた時代はアンシャンレジーム (ancien régime) で、その当時のモロッコに今はヴェールがかかっている、とも言う。両者ともにフィクションを通じて真実に迫るのだろう。

引用した両作の一節は、物語を「作者」と「歴史」に引っ張るメッセージと言える。その結果、文学 (littérature) が、それぞれ作者像と出来事という言葉の外に振れている。テレビなら当たり前視聴されるゲストの生身の身体と、写真やインタビューで再構成された歴史像とは、出版された物語においては語り（語の連なり）によってのみ意味される。その意味作用をテキストに依って仔細に検討してみたい。

## 1) モロッコ現代史の暗部とは

暗部とは光が当たらず視認しにくい部分を言う。そこに何も無いのではなく、あるはずの事物が判然としない。現代史の暗部は、史料や証言を用いても描き出せない出来事のことあれば、その名は知っていても思い出そうとすれば記憶が薄れていたり、何か遮蔽物のような別の事象と入れ替わっていたりする事件のこともある。遠い過去の出来事ならいざ知らず、たとえその場に居合わせなくても報道や噂から漠然と存在に気づいており、にもかかわらず詳述するには不確実すぎる証拠と、危うい記憶しか頼るものがないような、まるで社会の全構成員によって無いことにされてしまった事件、人物、土地に他ならない。

モロッコは19世紀末からフランス保護領（北辺はスペイン保護領）だったが、1956年、復位（1955）したムハンマドが帰国して独立を果たした。ベン・ジェルーンの物語は、国王の死去に伴って王位を継いだハサン2世（1961-1999）の治下に起きた出来事である。要点を①②にピックアップし下線を施す。

ハサン2世は1962年6月に憲法を改正し、君主権の極めて強い立憲王政を敷いた。対外的には未確定領土を巡ってアルジェリアと砂戦争を起こした（1962年10月）。①内政面の締め付けに反発して1965年3月に大学生、リセ学生らによるデモが頻発したが、同年6月に戒厳令が出された。国王は軍部と警察に依拠して異議申し立てを封殺した。一方、モロッコ政府は西側諸国から外資を導入して工業化、土地改革を進めて経済発展を図る。この点は独立後のアフリカ諸国で見られた「開発独裁」と類似する。1967年10月の六日戦争では反イスラエル、親アラブの立場を表明。ハサン2世は1970年8月に新憲法を制定して戒厳令を解除した。だが、軍部は不満を募らせ、②1971年7月、国王の誕生記念パーティーを狙ってクーデタを起こすが失敗。翌1972年8月には空軍が反乱を起こして鎮圧された。

相次ぐ軍の反乱に対して、国王は憲法改正（1972年2月）による一定の民主化を進めるとともに、経済国有化政策を推し進め、さらにスペイン領西サハラに非武装モロッコ人35万人を侵入させて実効支配する「緑の行進」（1975年11月）といったナショナリズム政策を選んだ。これを一種のポピュリズム（大衆迎合主義）と見ることもできよう。

なお、1945年にエジプト、サウジアラビアなど7か国が結成したアラブ連盟

に、モロッコは1958年に加盟している。1969年12月にはラバトで連盟サミットが開催された。また、アフリカ統一機構について、モロッコは1963年設立時の原加盟国だが、西サハラ問題のために1984年に脱退した。これらの連盟、機構はモロッコ・アルジェリア国境紛争の域内解決に貢献したが、西サハラ問題は国連に持ち込まれている。ベン・ジェルーンとスリマニの両作は、国内事件①②に翻弄される若い世代を描いているため、国際関係に深入りしないが、それでも随所に反映している<sup>(4)</sup>。

## 2) ①1965年の学生デモ：一族の物語

ベン・ジェルーンの『懲罰』は、事件の経緯を、主要登場人物の身に降りかかった得体の知れない災厄として描き出す。それは新生モロッコで、ある程度、将来を約束された中産階級の受難劇である。

「1966年7月16日とは、母の言葉にならえば自分の墓堀人に伝えるために、記憶の片隅に取っておくような恐ろしい朝である。それは無慈悲にも白い曇り空の暗い朝だった。(中略)二人の兵士の片方が、出て行きしなに父に言った。<明日、お前の息子(rejeton)はエルハジェブの兵営に出頭しなくてはならん。これが三等の切符だ。逃げて出すとためにならんぞ>。」(BJ, 9-10)

語り手なり登場人物が自分の置かれた状況をその場で徐々に理解するという意味で、物語はロードムービー的に展開する。語り手が思慮深いタイプであることが、「僕の犯した罪だって？それは1965年3月23日に、流血の弾圧に終わったある平和的デモ行進に参加したことだ。僕は一人の友人とそこにいた。すると突然、目の前で<シャバコニ>(ça va cogner「打ってくるぞ)」というあだ名の一団が、デモ隊をなんの理由もなく殴り始めたのだった」(BJ, 10)という回想から知られる。

だが、回想するのはもはや主体ではない。

「僕の認識番号は10366だ。今でも覚えている。一万三百番台はすべて国王から処罰された者のことだ。どこにも書かれておらず、言われてもいないが、懲罰、矯正、教訓、訓導が頭に叩き込まれていた。」(BJ, 42)

このような語り手の無力感は、兵営の新兵指導役で「司令」と呼ばれていたアバブーの「ここでお前たちは存在しない。お前たちは登録番号だ」(BJ, 47)という言葉によって裏書きされる。そして、ラバトに外出を許された折にも、出会った情報部の軍曹から自分の境遇を思い知らされる。

「— ほほう、大した警戒ぶりだな。俺をお前の口を割らせる秘密工作員だと思っているんだろう。俺たちは情報を得なければ回り道をしない。拳銃に電流を通せば誰でも喋るさ。

— 知っています。

— 何だ、知っている、とは。

— 友達がカサブランカの警察に拷問されました。

— なぜ。

— 彼らに考えはありません。警察は拷問が手当たり次第だと思い知らせていただけです。

— お前は政治活動をしているのか。

— いいえ。

— それじゃ、どうして番号が10300で始まっている。これは俺たち内輪の符丁だ。政治家と教授連中は嫌われ者だからな。」(BJ, 74)

このような主体性喪失を経験した後、語り手は「兵役義務など我々が逮捕されるまで存在していなかった」のに、「国民教育省が発した不公正極まる決定にあえてデモで反対した若者を鍛え直そうとして、それを隠蔽するために考案されたのだ」(BJ, 49)と考えるに至る。彼はその考えを、驚くべきことにアバブー司令官に直に開陳する。ある晩、二人の仲間とともに司令官から公邸に招かれた語り手は、合成皮革のソファを勧められ、茶をふるまわれる。大学で逮捕された語り手は共産主義者と疑われていたので、挑発に乗るまいと沈黙した末に、「真面目に答えようと決心」する。

「はい、司令官閣下、国民教育大臣ユーセフ・ベラベスは、17歳以上の生徒たちにリセ第2課程への進学を禁じ、職業教育に振りあてる通達を出したのです。この通達に反対するデモは、失業者とモロッコ労働同盟の労働者が学生に合流したとはいえ、非常に平和的に始まりました。鎮圧が極めて暴力的だったのです。」(BJ, 81)

だが、事態は好転も悪化もせず、語り手は総勢94人（と行方不明1名）の新兵の一人として、19か月も自由を奪われることになった。この作品には記録文学の趣がある。

一方、スリマニの物語は、立志伝風の成功を遂げた一族のサーガである。『他人の国』第2巻『私たちが踊るところを見て』のヒロインは、モロッコ人を父に、アルザスのフランス人を母に持ち、モロッコで初めて専門教育を受けた女医になるアイシャ・ベルハジである。作者の母親がアイシャのモデルである。第1巻『戦争、戦争、戦争』で語られたように、その母マチルドは、ただの主婦ではない。フランス人女性である彼女は、第二次世界大戦に通訳として従軍したアミーヌとストラスブールで知り合い、結婚してモロッコに移り住んだ。夫アミーヌはオマル、ジャリルを弟に、セルマを妹に持つベルハジ家の長男で、輸出用オレンジの品種改良を果たした開明的農園主として経済的にもっとも成功している。妻マチルドは、ユダヤ系ハンガリー人の産科医パロジに教わり、夫の経営する農園で診療所を開いた。第2部でアイシャは母の故国フランスに留学している。叔父のオマルは後に見るように警察幹部として部下を従える。

このように、スリマニは新生モロッコの近代化を担うべき実業家夫婦、警察管理職、医学生を物語に配して、ベン・ジェルーンの語り手が巻き込まれた事件を多角的に物語る。

カサブランカで学生デモを目撃したのは、フランス人のリセ教員アンリである。主要登場人物の多くは地方暮らしでデモと無関係だったので、事件はこの皮肉屋の教員を観察者として語られる。

「アンリは1965年3月の記憶に取り憑かれていた。当時、数百人のリセ生徒が、16歳以上に学校への立ち入りを禁じた通達に抗議して、カサブランカの通りに出たのだった。その頃、アンリはまだ市街のゴーチエ界隈に住んでいた。生徒たちが陽光あふれる大通りを抜けて、デルブ・スルタンの労働者地区まで練り歩くのが見えた。男の子は女の子を肩車していた。<僕らは学びたい！><ハサン2世は退位しろ、モロッコはお前のものじゃない！><パンを、仕事を、学校を！>と彼らは叫んでいた。」(S, 152-153)

続く叙述は凄惨だが、国王の非道をシニカルに伝える傍観者のフランス人像

が鮮明になる。

「続く数日の間、アンリはカサブランカの舗道に散る血痕を見て、当局が群衆に警告したのだと思った。ここでは子どもたちにまで発砲した。秩序は交渉では得られなかったのだ。3月29日、ハサン2世はこう宣言した。<国家にとって知識人を自称する者ほど深刻な危険はない。汝らは文盲な方がよかったくらいだ。>」(S, 153)

ベン・ジェルーンの『懲罰』で95人の若者は「王命による処罰」の当事者だが、スリマニの小説には処罰する側の実行部隊が登場する。

「1965年の学生騒動の間、オマルは殺戮の証拠隠滅に加わった。彼は部下たちとアイン・ショックの死体安置所を制圧し、数日間にわたって、自分が許可しない出入りを禁じた。家族らが建物の前に陣取って遺体の引き取りを要求していた。遺族を帰らせると、ある夜、オマルと部下は遺体を小型トラックの荷台に積んで、クルマの灯を消した。青年や子どものひょろっとして軽い死体は、搬送役の刑事たちでも楽に抱えられた。彼らは無人の墓地に向かい、オマルは今も墓を照らす月光と、散り散りに掘った墓穴を覚えていた。警官らはトラックから荷下ろしを始めた。誰かが祈ろうとしたが、オマルはそれを制止した。これは神様が口出しすることではないのだ。

赤貧洗うがごときこの国では、札びらをポケットに突っ込んでやれば用が足りた。医者は負傷者を一人も見なかったと証言した。墓掘り人は、数ダラム握られれば、殺された子どもたちの墓穴を掘ったことを忘れてくれた。」(S, 222-223)

### 3) ②1971年の国王暗殺および軍事クーデタ未遂：民族の悲劇

ベン・ジェルーン『懲罰』で青年たちは1年半以上に及んだ拘束から、突如、解放されて帰宅した。語り手は大学に復帰し、フランス語教員資格を取得したものの、どうやら懲罰のためもあって田舎の学校に赴任させられた。

だが、三年後、カサブランカの哲学教師（リセ最終学年のバカロレア受験学級を担当するエリート教員）になった彼は、なぜかかつての収容所司令アバブーの署名入りの召喚状を受け取った。あのエルハジエブの兵営で健康診断を受けろ、と言うのである。語り手は一刻も早く国外逃亡を、と給料をはたいて航空券を入手したが、空席がなくて出発は遅れそうだった。そんなある日、彼は二人の「懲罰経験者」とフェズに健康診断のために赴いた。そして、街のカフェ

で、誰あろう平服のアバブー司令と鉢合わせた。「何のための再招集でありましょうか」と尋ねると、司令は「お楽しみ (surprise)」(BJ, 152) と答えるだけだった。すっかり憂鬱になった語り手たちは、二人のスウェーデン人女性旅行者をナンパして、「生まれた時から民主主義が血管を流れている」(BJ, 153) 娘とセックスし、翌朝、アドレスを交換して別れた。こうして事件は、これから当事者になるかもしれないと怯える傍観者によって物語られる。

「1971年7月10日、14時8分。1400名の学生士官が25台のトラックに分乗して、国王ハサン2世の夏の離宮、ラバトから数キロの海岸沿いのスキラート宮を包囲した。ムハメッド・アバブー中佐は北門から押し入る。兄のモハメッドは南門からだ。国王の誕生日のことだった。(中略) 皆殺しが下命された。機関銃での殺戮。プール、テーブル、ビュッフェのいたるところ鮮血が飛び散る。王はトイレに逃げ込む。」(BJ, 154)

「[テレビを見ようとカフェに] 殺到した人々は、高名なジャーナリスト、ベンダドゥーシュが、深刻な面持ちで声明文を読むのを見る。<今しがた軍が権力を掌握…王政は打倒された…注意せよ…いずれ別の声明が届く…人民は解放され、腐敗した王政はもはや存在しない…これは人民と軍による革命である。注意を怠るな。>」(BJ, 155)

スリマニでも同じ日の光景が、当時の報道を用いて次のように語られる。メーディは後にアイシャと結婚する経済官僚だが、学生時代は「カール・マルクス」という渾名を恩師アンリからもらっていた。

「1971年6月末、メーディは国王の誕生日祝賀会の招待状を受け取った。大西洋を望むスキラート宮で42歳の誕生日が祝われるのであった。王国の少壮官僚はぜひ出席するように、と陛下のお言葉が、関係省庁の大臣から伝えられた。」(S, 254)

王宮はイスラム教の戒律により禁酒なので、メーディはアンリの別荘に寄ってワインを飲もうとフランス車シムカを走らせた。だが、彼はそのままアンリと海水浴を始めた。憧れのアイシャがその日に帰国すると知ったからである。

「— 僕はそこにいたはずですが、とメーディは出し抜けに言った。

- 何の話だ、とアンリが尋ねた。
  - 国王陛下の誕生日です。僕も招待されていました。
  - ようやく納得がいったよ。
  - 何が？
  - 君の服装、君の物腰さ。それなら君はアイシャに礼を言うといい。私が思うに、君はそちらに行くより、ここにいて良かったよ。
- アンリはラジオのボリュームを上げた。<注意せよ、注意せよ。軍が権力を掌握。王政は瓦解した。人民軍が権力を掌握した。これから新たな時代が始まる。>」(S, 264)

軍事クーデタは失敗し、事態は急速に収束する。ベン・ジェルーンの語り手は、反乱軍に自分たち94名の元被拘束者が含まれていたかもしれない、とフェズで聞いたアバブー司令の「お楽しみ」という言葉から類推する。

「僕は国王のガーデンパーティーには居合わせなかった。実際、奇跡的に命拾いしたところだった。もしアバブーが勝利していたら、ハサン2世から懲罰された僕たちは、命を安売りさせられていたろう。彼は無理やり僕らを動員して、あえて抵抗する人々を銃殺させていたろう。アバブーはそんな男だ。手に負えない軍人だったからこそ、ウフキルは反体制学生の性根を入れ替える仕事を彼に任せたのだ。」(BJ, 160)

史実を補えば、モハメッド・ウフキルは当時の内相で、実は反乱軍に加担していたが、途中で仲間を裏切って敢然と処断する側に回った。また、作中で「司令官」と呼ばれているアバブー中佐は、語り手らが収容されたアヘルムルー（ベルベル語でライオンの子）陸軍学校の校長だった。ベン・ジェルーンの語る「1400名の学生士官」の投入には説得力がある。

スリマニの小説で、このクーデタ未遂は、とりわけ国王の写真を執務室に飾る農園主にとって価値観の劇的変化を意味した。子どもたち（アイシャと弟のセリム）が家を出てから、アミーヌとマチルドはテレビを見ながら退屈な夜を過ごしていた。その日、クーデタ派軍人の処刑映像が流れる。

「名を知られ、共に飲み、踊り、食べ、賞賛もされた人々が、一体どうしてそこにいるのだろうか。こんな西部劇の書き割りみたいところで、つむじ風に吹かれ、目

の前に並んだ十丁もの銃から弾丸を喰らう羽目になったとは。マチルドの声が大きくなる。この有様を見ているはずの妻たちを思って泣いているのだ。そして、父親たちがテレビの前に連れてくる子どもたちを思うと、ほとんど叫びそうになる。(中略) マチルドはすすり泣く。〈どうして私たちにこんなものを見せるの。あの男の人たちは、私たちの知り合いじゃないの。〉アミーヌは継ぎ目が血の気を失うほど拳をきつく握る。険しい目で妻を見据える。〈お前に何が分かる。権力がどんなものか、お前はちっとも分かっていない。〉」(S, 274-275)

アミーヌはまだ妻を殴ってはいない。だが、権力と一体化せねば生き延びられない彼は、貧しいムスリム大衆に迎合する政府と王室に、漠然と不安を抱いたのだろう。妻に怒鳴るのは恐怖の裏返しである。妻の提案で彼の農園にはプールが作られ、その富が嫉妬されていたからである。

警察幹部のオマルはどうだろうか。翌年、マラケシュ地方の美しい港湾都市エッサウィラ(旧名モガドール)に赴任したオマルは、カフェ店主から「まるで大臣か高級官僚のように迎えられた」(S, 298)。薬物が取引され盗難旅券が売買されるホテルへのガサ入れや、不法滞在者の検挙が、彼の職務になっていた。

#### 4) 現代史と小説

本論は、モロッコ現代史の暗部にわだかまる出来事を、小説表現から思い描こうとしてきた。物語はたんなる語の連なりではない。前掲の学生デモやクーデタ未遂のように新聞、ラジオ、テレビ、あるいはカフェの客や家庭の団欒の中で語られて消費される。出来事の同時代を生きる人々に物語は共有されているが、半世紀を隔てると、読者が物語とその現実での対応物(指示対象)(réfèrent)を関連づけるのは難しくなる。そこでベン・ジェルーンとスリマニは、序文、跋文の趣の文章を作品の「境界」に配して、社会で共有されるべき物語に、自分の物語を関係づける。ベン・ジェルーンは体験に基づく証言性を強調した。スリマニの場合、広がりすぎたフィクションの物語を、謝辞で社会の共有財としての歴史意識に引き寄せた。公正和解委員会への言及がそうである。

こうして、作品中に仮構されていた「語る主体(sujet parlant)」は、社会的責任を果たし市民として「語る主体」の性格を帯びる。はたしてこれはプロレ

タリア文学やナショナリズム文学のような説教臭い古びた物語作法なのだろうか。作中の語り手を無理に作者、それも発言する作家と一致させれば、小説が貧しくなりかねない。小説は主体にとって居心地の悪いジャンルだからである。

小説の語り手は一人称小説に見られるように主人公になりうるが、語る主体と同義ではない。それでは舞台芸術を例に取ればどうなるのだろうか。ミシェル・フーコーは、「演劇においては (...) 言述は語る主体によってしか存在しないが、言述が語る主体を誕生せしめる」<sup>(5)</sup> と言う。だが、この言い回しそのものが、語り物質性を疑うモダニズムの批判にさらされる。まして演劇とは異なり、紙の上の言述はどこにも身体を持たず、文体に声を感じるかどうかは読者に任される。モーリス・ブランショ流の作者像、あるいはフーコーの言葉では「作家は作品によってしか存在しないのに、作品の中に消失させられる」<sup>(6)</sup> という「使い古された逆説」にかかれば、ベン・ジェルーンとスリマニによる作者の介入は、言葉以外のどこにも現実の身体を持たず、社会とは関係がない。小説の「境界」に配されたメッセージは、たんなる言語の偏差のひとつとなる。

ここで注意したいのは、ベン・ジェルーンがまさにそのようにして主体を喪失させながら書いてきた、という事実である。アリソン・ライスは小説における自己引用を論じて、ベン・ジェルーンの『アーモンドの木は傷から枯れる』(1976)、『代書人』(1983)、『目を伏せて』(1991)にはほぼ同じ表現で現れる一文に注目する<sup>(7)</sup>。

「私はもはや顔を持つまいとして書いている (j'écris pour ne plus avoir de visage.)」

とりわけ『目を伏せて』では、引用文の直後で語り手が解説して、「やがて語るのが書物だけになるような完全な匿名性を待ちつつ、私は書いている」という自己消失の願望を述べている。これは『懲罰』のアバブー司令の言葉「ここでお前たちは存在しない。お前たちは登録番号だ」(BJ, 47)を内在化していないだろうか。だからこそ、兵營の語り手は、もはや顔と名前を持たない番号だけの存在になるまいとして詩を書いた。ライスはポール・ド・マンの自伝論「Autobiography as De-Facement」の「face」が「顔」を含意し、したがって自己について語ろうとすれば「顔の見分けがつかない」「顔を失う」「顔を醜く壊される」と解釈できることに注意を促す<sup>(8)</sup>。ベン・ジェルーンが小説家として、

「もはや顔を持つまいとして書く」のであれば、まだ「顔」を消されていないことが作品の存在証明となる。『懲罰』は、この考えの起源を示すとともに、そこから引き返す道程として作家キャリアが拓かれたことを示すだろう。

一方、スリマニは「顔」を失うというより、むしろ現代の普遍性を目指して『他者の国』3部作を書いているように思われる。2022年3月8日国際女性デーに MediTV Afrique で行われたインタビューで、「あなたはどのような真理に到達したいのでしょうか？」と尋ねられて、「それは感情の普遍性といった類の何かです」<sup>(9)</sup>と答えている。普遍性を「現代の」と限定するのは、モロッコ出身の作家アブデルケビール・ハティビが言うように「時代の刻印を帯びていない普遍性など存在しない」<sup>(10)</sup>からである。ムスリム女性、モロッコ出身者一般ではなく、一族の歴史の個別性について語りながら、世界中の読者がそれぞれの感情を抱くことが、作者の求める普遍性となるのだろう。

最後に、両作における現代的普遍性とは何かと問うなら、権威を脅かされた国王が大衆に迎合しながらナショナリズムに傾斜してゆくこと、そして国のまとまりが宗教的ポピュリズムに収斂してゆくことに抵抗できるものこそ、今この世界で必要とされる普遍性であろう。

## 付記

成城大学フランス文化研究会（Azur の会）で2022年7月2日に口頭発表した後、質疑応答で気づいたことを加筆した。来場の会員諸氏に感謝申し上げます。

## 註

- (1) 出発点は以下の拙論だった。「民族史と現代史のはざまの回想 (1) ～ジゼル・アリミの『オレンジの乳』をめぐって」『ヨーロッパ文化研究』第24集、2005；「民族史と現代史のはざまの回想 (2) ～ジゼル・アリミ『フリトゥナ』における再話について」『ヨーロッパ文化研究』第25集、2006。現在の研究対象を親世代の居住地とともに記せば、エドガー・モラン（テッサロニキ、ギリシア）、ミシェル・サルド（テッサロニキ、ギリシア）、ピエール・パシェ（ウクライナ）、エリエット・アベカシス（モロッコ）だが、後の方ほど小説に寄っている。

- (2) Tahar Ben Jelloun, *La Punition*, Gallimard, 2018, p. 149 以下、同書からの引用は本文中に (BJ, 149) と示す。
- (3) Leïla Slimani, *Regardez-nous danser. Le pays des autres*, 2, Gallimard, 2022, p. 367 以下、同書からの引用は本文中に (S, 367) と示す。同書の制作現場と、本論で触れる少壮経済官僚メーディの晩年が次の作品に読める。L. Slimani, *Le Parfum des fleurs la nuit*, Stock, 2021
- (4) 収容所のような軍施設で上級曹長アッカは、インドシナで「中国人」を殺して楽しんだ思い出を語った。当時、上官だったフランス人大佐は「アルジェリアで我らの兄弟を殺すために投入された」ので、自分は「復讐のつもりでアルジェリア同胞を助けた。こんなのはぜんぶセイジ (“bolitique”) だがな」(BJ, 37) と親しげに言った。しかし、国際情勢は変化していた。ある日、兵営をドリス・ベン・オマール将軍が来訪し、若い徴募兵たちにアルジェリア軍と戦った1963年の「砂戦争」の武勲を語り、フランスが1934年に併合し、以後はアルジェリア領となった鉾山町ティンドーフに言及する。(BJ, 82) 若者たちは近い将来、砲弾の餌食になるのだと予感する。語り手の青年は、ラジオで国際ニュースを聞いているが、上官から「敵、つまりアルジェリアとの内通」を疑われていると感じる (BJ, 98)。
- (5) Michel Foucault, édition établie par Henri-Paul Foucault, Danielle Lorenzini et Judith Revel, *Folie, langage, littérature*, Vrin, 2019, pp. 233-234 国立図書館所蔵の未公刊原稿で題名の「言語の外にあるものと文学 (L'extralinguistique et la littérature)」は編者による。邦訳が2022年9月に刊行されたが拙訳を用いた。『狂気・言語・文学』法政大学出版局、阿部崇・福田美雪訳。
- (6) Foucault, *op.cit.*, p. 229
- (7) Alison Rice, « Le « m'entendre » francophone: l'autocitation et la signature « autobiobibliocopique » dans l'œuvre de Tahar Ben Jelloun, Assia Djebar et Abdelkébir Khatibi » in Martine Mathieu-Job (éd.), *L'entendre fancophone*, Presses Universitaires de Bordeaux, 2004, pp. 285-286
- (8) « Death is a displaced name for a linguistic predicament, and the restoration of mortality by autobiography (the prosopopeia of the voice and the name) deprives and disfigures to the precise extent that it restores. », Paul de Man, *The Rhetoric of Romanticism*, Columbia University Press, 1984, p. 81 強調は引用者。
- (9) 引用原文は以下。« A quelle vérité souhaiteriez-vous accéder ? — C'est quelque chose de l'ordre de l'universalité des émotions. »
- (10) アブデルケビール・ハティビ『マグレブ 複数文化のトポス ハティビ評論集』澤田直編訳、福田育弘訳、青土社、2004、p. 199